

## 研究課題：多文化共生推進への地域と大学生との取り組み

白頭宏美 総合政策学部 専任講師（有期）

### 1. 研究の背景

本研究は地域における多文化共生の推進のために SFC の学生が関わる手法の一つとして、デジタルストーリーテリングをとりあげ、その実践の取り組みと課題を探るものである。

日本に在住する外国人住民も地域社会の重要な構成員であるという観点から、総務省は、地域における多文化共生を推進するため、2006 年に「地域における多文化共生推進プラン」を策定し、2020 年にはその改訂を行った（総務省 2020）。「多文化共生」とは、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」（総務省 2006）である。2020 年の改訂では、それまでの①「コミュニケーション支援」、②「生活支援」、③「多文化共生の地域づくり」という 3 つの施策に加えて、④「地域活性化の推進やグローバル化への対応」が加わり、それぞれの課題が挙げられている。本研究では、③「多文化共生の地域づくり」の中の、「多文化共生の意識啓発・醸成」について、地域の多文化共生の意識啓発に大学としてどのように関わられるかということを探った。

地域における多文化共生の推進は、以前は、外国人住民が集住する地域で先進的な取り組みがなされていたが、現在は全国の自治体共通の課題となりつつある。藤沢市においても、現在約 6,600 人の外国人住民がおり、「藤沢市多文化共生のまちづくり指針」の策定も行われている（藤沢市 2021）。しかし、2014 年の「藤沢市多文化共生のまちづくり指針改定版」（藤沢市 2014）によると、「相互理解」の取り組みとして、公民館・青少年会館にて国際交流イベントや日本語教室等を行っているが、人が集まらないのが課題となっていると指摘されている。

そこで本研究では、地域社会に対する意識啓発の取り組みとして、デジタルストーリーテリングに着目した。デジタルストーリーテリング（DST）とは、「①日常生活をテーマにした身近な経験や思いをものがたり、参加者たちがアドバイスをしながら関わってゆくワークショップ（ストーリー・サークル）のち、②原稿を書いて、ストーリーに関係のある写真や映像をコンピューター上に並べ、自らの声でナレーションを入れて、2～3 分の映像に編集し、上映する活動」（小川 2016）であり、アメリカで誕生し、その後世界中に広がった市民活動である。医療、保育、教育等様々な分野で取り入れられているが、その一つとして、地域社会の文化的マイノリティーの人々の声を映像にし、地域の相互理解に役立てるというものがある。日本においては、大学や学校教育における授業実践としての報告（須曾野ほか 2011, 一ノ瀬 2016）や、留学生対象の日本語クラスや地域日本語学習支援における実践報告（半沢ほか 2019）などがあり、DST の様々な活用法とその可能性が述べられている。その中で、DST が自己理解、他者理解、相互理解のツールとなることが共通して挙げられており、DST は「多文化共生の地域づくり」という場面にも有用であると考えられる。

本研究では、藤沢市の青少年国際化推進事業を担っている「公益財団法人藤沢市みらい創造財団」と協力し、筆者の研究会に所属する学生が DST を用いたワークショップを開催し、藤沢地域

の多文化共生の意識啓発を目的とした相互理解の場の活性化という課題に取り組んだ。

## 2. 研究の計画と目的

まず、2022 年度春学期に筆者が担当する研究会において、デジタルストーリーテリング(DST)について学び、7月初旬に学生が DST の手法を用いて自身の映像作品を作成する。学内において上映会を催し、上映した DST をもとに対話会を開く。その後、作成過程、上映会、対話会についての振り返りを行い、地域で DST のワークショップを企画する際の課題を学生とともに検討する。また、DST の作成過程及び対話会についての考え、気づきについて申請者が各学生に対してインタビュー調査を実施する。そこから、DST が多文化理解にどのようにつながるか考察を行う。

秋学期の研究会においても DST の手法を用いて映像作品を作成し、研究会内で上映会、および対話会を実施する。その後、藤沢市みらい創造財団との共催事業として、地域住民を対象とした DST 上映会・対話会を開催する。実施後、参加者に対するアンケート調査を依頼し、調査結果を分析するとともに、ワークショップの振り返りと課題の検討をする。

このように、本研究では、デジタルストーリーテリングを活用し、地域の多文化共生推進に学生が主体となって取り組む中で、その手法の課題を探ることを目的とした。

## 3. 研究会での DST 活動とインタビュー結果

### 3-1. DST 活動

2022 年度春学期の研究会において実践した DST の作成から上映会・対話会までの流れは以下の通りである。尚、授業では以下とは別に輪読も行い、DST について、多文化理解についてなど文献を読み、読んだ内容のディスカッションを行うことで理解を深めた。

5月 ストーリーサークル、スクリプト作成

6月 スクリプトのシェア、推敲、画像選択・映像作成、DST 作成

7月 DST 完成、上映会・対話会

ストーリーサークルとは、DST の活動の一番初めに行う活動である。ファシリテーターのもので、参加者が DST にしたい内容をそれぞれ話してシェアをする。ファシリテーターや参加者からの質問に答えたりすることで、参加者は自身の作りたい DST へのアイデアを固めていくプロセスがある。

2022 年度春学期の研究会の学生は、留学生も日本出身の学生もあり、生まれた国と育った国が異なる者、インターナショナルスクールを卒業したもの、留学生として来日したが日本になかなか馴染めなかった者など、それぞれが異なる文化背景をもち、DST についてもそれぞれの想いのつまった作品が完成した。

上映会・対話会は、他の研究会と合同で実施した。参加者は、2022 年度春学期の筆者の研究会の参加者 5 名と他の研究会の参加者 20 名である。上映会・対話会では、5 名の作品を順に上映し、その後、25 名が 2 つのグループに分かれ、ファシリテーターが入り対話会を行った。対話会では、上映された作品について質問や感想のみでなく、それぞれの参加者が自身の経験を語るようにファシリテートすることが重要である。上映したメンバーだけでなく、対話会に参加する参加者それぞれが自身の想いを語ることによって、そこに潜む社会の問題や課題について気づき、深く語

り合うことを目的としている。

### 3-2. インタビューとアンケート分析結果

DST 作成から上映会・対話会の一連の活動後、筆者の研究会の 5 名にインタビュー調査を行い、インタビューデータの分析を行った。インタビューは半構造化インタビューで、DST の活動過程を追いながらその時印象に残ったこと、気づいたことなどを述べてもらった。また、上映会・対話会に参加した学生へはアンケート調査の協力を依頼した。インタビューデータの分析の手順は以下のとおりである。①インタビューデータの文字化資料をもとにコーディングを行い、②カテゴリーに分けて名前をつけ、③個々の事例を横軸、コードを縦軸としたコード・マトリックスを作成した（佐藤 2008）。また、アンケート調査の自由記述部分の文字データについても、①コーディングを行い、②カテゴリーに分けて名前をつけた。

分析の結果、DST を作成した学生は、以下のように認識していたことがわかった。

DST 作成過程においては、DST は「自分への理解」が深まったと述べる学生が複数おり、自身について「他者へ伝えることへの不安」は感じたものの、作品を見せるのは研究会内であるということから「聞き手の受け入れ」をある程度予想しながら作成していたことがわかった。制作における難しさとしては「短い時間にまとめる難しさ」「画像選択の難しさ」などをあげていたが、21 春の研究会参加者においては、ストーリーの内容自体はすぐに頭に浮かび悩まなかったと述べていた。

また、DST 上映会・対話会について、上映会・対話会は、「他者を深く知る機会」「共感を得る場」「共感をする場」であると認識していた。日常生活においては敢えて話題にしないようなトピックについて、DST の作品を上映することで、まず作成者の想いを共有し、それに触発される形で対話会の参加者もそれぞれ自分の想いを伝えるという連鎖が生まれたことに複数の学生が「DST のパワー」という言葉を使い、評価していた。

さらに、上映会・対話会に参加した学生のアンケート調査からは、以下のことがわかった。

DST 作品を観ることで、作成者に「共感」したり「経験・価値観の共有」したりすることができ、DST は映像や音楽があることにより「説得力」があると考えていた。対話会では、「普段シェアしにくいトピック」について話し合うことができ、「参加者それぞれの過去」について触れることで想いを「共有」できたと述べられていた。

## 4. 地域における DST を用いた取り組み

2022 年度秋学期の研究会においても、3 と同様に学生が DST を作成したが、地域での上映会・対話会も念頭においていたため、DST のテーマを「多文化共生」とし、観た人が多文化共生について考えるきっかけとなるものを目指して作成した。春学期のメンバーとは 1 名を除いて入れ替わり、6 名の履修者がそれぞれの DST を作成した。これまでの経験の中で感じた文化的コンフリクトや、言語文化が異なる人々と理解し合えた経験などについての作品が完成した。

研究会内及び他の研究会と合同で上映会・対話会を行った後、藤沢地域の多文化共生推進を目的としたワークショップ 2022 年 2 月 5 日に開催した。藤沢市みらい創造財団との共催事業として、藤沢市青少年会館を会場として行った。対面での開催の予定であったが、社会状況を鑑み、急遽対面とオンラインのハイブリッド開催とし、参加形態は希望制とした。

ワークショップでは、研究会の学生4名のDSTを上映し、その後対話会を行い、多文化共生社会において必要なことをグループでディスカッションした。参加者は藤沢市内外からの14名で、小学生の保護者、地域の国際交流事業に関わる方、自治会活動に関わる方、日本語教育関係者、学校教育関係者などであり、海外出身の藤沢市の住民も3名いた。参加形態は、対面での参加者7名、オンラインでの参加者7名であった。進行やファシリテーターは筆者が務めたが、学生は、会場の運営、対話会での意見のまとめ役を担った。

対話会では、参加者それぞれの立場や経験をもとに上映された作品を観て感じたキーワードを書き出し、そのキーワードを付箋にして貼りながらグループで話し合い、多文化共生についての考えをまとめた(写真①②)。対面の参加者のグループはホワイトボードと付箋を用い、オンラインの参加者はオンラインツールを用いて、グループでそれぞれの経験や考えをシェアした。

参加後のアンケート調査からは以下のようなコメントがあった。

- ・外国人の方から体験談を聞くことができ、両輪で多文化共生について考えを深めることができました。
- ・DSTは知っていましたが、実際に見たのは初めてです。みなさんが、自分の気持ちを自由に伝えていることが心に響きました。伝えることの大切さ、伝えようとするものの大切さが分かりました。
- ・いろいろな声を、自分も当事者として発し、また聞けてよかったです。

マイナスの評価のコメントとしては、以下があった。

- ・作品の日本語のスピードがはやかった。
- ・時間が足りなかった。

今回、多文化共生の意識啓発を目的とした相互理解の場としてのDSTの上映会・対話会を開催したが、多文化共生について考えを深めるきっかけとして場づくりはできたのではないと思われる。

写真①



写真②



## 5. 今後の課題

2022年度のDST活動を通して、DSTが作成者の自己理解を促し、上映会・対話会を通じた相互理解が促進されることがわかった。また、地域において、多文化共生の意識啓発を目的とした

相互理解の場を提供するという目的で、DST を利用したワークショップを開催することもできた。今後は、地域の多様な文化背景をもつ住民の方に DST を作成するワークショップに参加してもらい、学生が DST 作成のサポートをすることを目指したい。それにより、地域の様々な文化背景を持つ住民の考えや想いを伝え、相互に理解しあうことが可能であると考えからである。また、様々な文化背景をもつ SFC の学生が主体となって開催することで、学生、地域住民双方の学びとなり、多文化共生の意識啓発・醸成につながると考える。そのためには、以下の課題がある。

- ・学生がワークショップのファシリテーターとなるために、DST 作成や上映会・対話会のノウハウやサポートの方法を学ぶこと
- ・より多くの住民の方に参加してもらうため、広報の手段を工夫すること
- ・共通言語である日本語を使用しながら、日本語の理解がまだ浅い地域住民の方にも参加してもらえるようサポートの方法を考えること

以上、今後もこれらの課題の解決を模索しながら、「多文化共生の地域づくり」を学生が主体となって行えるよう、多文化共生の意識啓発を目的とした相互理解の場づくりを目指して今後も研究を継続していきたい。

#### <参考文献>

- 一ノ瀬秀司 (2016) 「21 世紀に求められる資質・能力を育むデジタルストーリーテリングの効果 — 中学校における授業実践から —」『日本教育工学会論文誌』 40(3), 187-196, [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjet/40/3/40\\_40023/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjet/40/3/40_40023/_pdf) (2022/2/24 閲覧)
- 小川明子 (2016) 『デジタル・ストーリーテリング—声なき想いに物語を—』リベルタ出版
- 佐藤郁也 (2008) 『質的データ分析法』新曜社
- 須曾野仁志・井川朋香・鏡愛・下村勉 (2011) 「デジタルストーリーテリング制作方法紹介ビデオの開発と活用」『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第 31 号, 59-64.
- 総務省 (2006) 「多文化共生の推進に関する研究会報告書～地域における多文化共生の推進に向けて～」 [http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota\\_b5.pdf](http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf) (2021/2/24 閲覧)
- 総務省 (2020) 「『地域における多文化共生推進プラン』の改訂」 [https://www.soumu.go.jp/menu\\_news/s-news/01gyosei05\\_02000138.html](https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei05_02000138.html) (2022/2/24 閲覧)
- 半沢千絵美・矢部まゆみ・樋口万喜子・加藤真帆子・池田恵子・須磨修一 (2019) 「デジタル・ストーリーテリング (DST) を用い活動の可能性 多様な日本語教育の現場から」 當作靖彦監 『ICT×日本語教育—情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践』ひつじ書房, 122-136
- 藤沢市 (2021) 「多文化共生推進事業」 <https://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/jinkendanjyo/kurashi/tabunka/kyose.html> (2022/2/24 閲覧)
- 藤沢市役所 企画政策部平和国際課 (2014) 「藤沢市多文化共生のまちづくり指針 改定版」 <http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/jinkendanjyo/kurashi/tabunka/documents/shishinjapanese.pdf> (2022/2/24 閲覧)